

観戦記

高崎高校バレーボール部の夏が終わった。8月7日（金）、インターハイ全国大会3回戦に挑んだ高崎高校は、福井工大福井（福井）にセットカウント0-2で敗れ、この大会を終えた。インターハイを迎えるまで、君たちがどのような目標を掲げていたのか、外野の私たちには知る由もない。もちろん目標は高く「日本一」を掲げていたのかもしれない。しかし、群馬県の高校バレーを客観的に見れば、全国の強豪県と肩を並べる環境とは言い難い。だからこそ、現実的な目標は「まずは全国1勝」だったのではないだろうか。

3年生が1年生の時、高崎高校は47年ぶりに春高バレーへ出場した。高校バレーに携わる者なら誰もが憧れる東京体育館のオレンジコート。超満員のスタンドから君たちに声援を送ることができたことを、今でも誇りに思っている。結果は大阪・昇陽高校に0-2で敗戦。公立進学校が春高に出場したことはマスコミにも大きく取り上げられたが、当時は「全国大会に出場すること」自体が大きな目標であり、その目的は十分に果たした大会だったのかもしれない。

大黒柱の岩井くんが卒業し、新チームとなった。新人戦こそ優勝したものの、その後は茨の道が待っていた。高校総体は準決勝で前橋商業に0-2、インターハイ予選も準々決勝で桐生市立商業に1-2で敗れ、ベスト4にも届かなかった。

47年ぶりに打ち上がった大輪の花火。その次の花火は、いったい何年後になるのだろうか。そんな思いを抱きながら迎えた昨年の春高バレー県予選だった。しかし、選手たちは準々決勝、準決勝とともに2-1で競り勝つと、決勝では桐生市立商業を3-0で破り、2年連続4回目となる春高出場を決めた。

47年ぶりの快挙が、まさか2年連続で実現するとは。振り返れば、選手たちは最初からこの舞台を目標に努力を積み重ねてきたのだろう。再び東京体育館で新年を迎えられることに感謝しながら、島根代表・安来高校との一戦に臨んだ。前年は大阪代表、今年は島根代表。人口規模だけを見れば、条件は格段に良くなり、「今年こそ全国1勝を」と淡い期待を抱いていた。しかし、その期待はあえなく打ち砕かれた。スタンドでは「ベスト応援賞」を受賞するほど素晴らしい応援が選手たちを後押ししてくれたものの、全国で1勝を上げることの難しさを改めて痛感した大会だった。

キャプテン・新井くんが卒業し、現チームとなった。新人戦は決勝でこそ1セットを失ったものの危なげなく優勝。新年度に入ると高校総体では初戦から決勝まで失セット0で完全優勝を果たした。

続く関東大会では、2回戦で鷺宮（埼玉）を2-0、3回戦で作新学院（栃木）を破って準々決勝へ進出。土浦日大（茨城）には敗れたものの、堂々の関東ベスト8という成績を残した。そしてインターハイ県予選でも初戦から決勝まで失セット0。圧倒的な強さで2年ぶり7回目の全国大会出場を決めた。

インターハイ全国大会初戦の相手は、いきなり九州王者の大村工業（長崎）。「初戦から九州チャンピオンとは…」と思わず苦笑してしまったが、京都府立体育館でその試合を応援できたこと自体、選手たちには感謝しかない。まあ、仮に初戦を落としても敗者戦がある。そう割り切って観戦した予選ラウンド1回戦は、開始が1時間以上遅れるハプニングもあったが、結果は0-2。それでも内容は決して悲観するものではなかった。特に第2セットは最後まで互角の戦いを演じ、「ひょっとしたら」という期待さえ抱かせてくれた。「あれ、高高ってこんなに強いチームだったのだろうか。」レシーブは驚くほど安定し、力任せではなくフェイントやコースを巧みに使い分ける攻撃。全国の強豪を相手に堂々と渡り合う姿に、大きな手応えを感じた試合だった。

1 時間半後に行われた敗者戦の相手は高岡第一（富山）。第1セットを25－13で圧倒すると、第2セットも25－19で制し、待望の全国初勝利をつかみ取った。

決勝トーナメント進出だけでも夢のようだったが、2回戦では小松大谷（石川）との激闘を2－1で制し、高崎高校バレーボール部史上初となる全国ベスト16入りを達成した。

ここまでの歩みを振り返れば、この全国16強入りは決して偶然でも、勢いだけでもないだろう。春高で全国の壁にはね返され、インターハイ予選で涙をのみ、あと一步届かなかった悔しさを何度も味わってきた。そのたびに君たちは立ち止まることなく、練習を重ね、課題と向き合い、少しずつ、しかし確実に強くなっていった。その積み重ねが、京都の舞台で大きな花を咲かせたのである。

福井工大福井との3回戦。試合終了の瞬間、選手たちは静かにコートへ一礼した。画面越しではあったが、その姿はとても清々しかった。「よくやった。」私は思わずそうつぶやいていた。しかし次の瞬間、目元を押さえる選手の姿が映った。その姿を見たとき、私は胸が熱くなった。負けて悔しいと思えるのは、本気で勝ちたいと思っていた証拠である。全国16強という結果だけなら胸を張ればいい。それでも涙があふれるのは、「もっと勝てた」「もっと仲間と戦いたかった」という思いがあったからだろう。これまで私は多くの大会を観戦させてもらってきた。しかし、これほど「負けてなお誇らしい」と思えた試合はそう多くはない。

君たちは、高崎高校バレーボール部の歴史を書き換えた。47年ぶりの春高出場も、2年連続の春高出場も、そして全国初勝利も、全国ベスト16も、すべて君たちが築いた歴史である。しかし、私が何より価値があると思うのは記録ではない。

「全国では勝てない。」そんな空気が、もしこれまでどこかにあったとすれば、君たちはそれを完全に打ち破ってくれた。

これから高崎高校のユニフォームを着る後輩たちは、「全国で1勝する」ことを夢ではなく目標としてコートに立つだろう。そして「ベスト16は先輩たちがやった。次は自分たちがその先へ行く。」そう思えるはずだ。その基準をつくったことこそ、君たちが残した最大の財産なのである。

京都で流した涙は、決して敗者の涙ではない。努力を積み重ね、自分たちの限界に挑み続けた者だけが流せる涙である。ありがとう。京都で見せてくれた君たちの戦いは、高崎高校バレーボール部の新しい歴史の始まりだ。そして、その歴史が生まれる瞬間に立ち会えたことを、一バレーボールファンとして、心から幸せに思っている。

